

私のふるさと、被災地の今

著者	菊地 美帆
雑誌名	新潟日報 上越かわらばん
巻	322
ページ	2
発行年	2012-06-03
URL	http://hdl.handle.net/10631/1032

看護大通信

〈 93 〉

私のふるさととは宮城県りした友人もいます。

北部にあり、家族は東日 昨年5月の連休に震災

本大震災で震度7を記録 後初めて帰省しました

した地域に暮らしていますが、津波によって破壊さ

す。幸い内

陸部であり

津波の被害はなかったの

ですが、ライフラインが

約1週間途絶え、私も遠

く離れた上越から家族の

ことを心配する毎日です。

た。

以前暮らしていた石巻

市の沿岸部の町は壊滅的

な被害に遭い、家を流さ

れたり、家族を亡くした

友人と泥だしの手伝いをと法事を挙げられる」とるようになり、生きがい
しましたが、かなりの破話し、3人の孫の成長を見つけてることで強くな
損状態から店の再開や住樂しみに暮らしてしまわれるということを、震災
むことは難しいと思えるす。

津波でレストランと自
たちからあらためて学び

あれから1年、今年も 宅を流され生きる希望を
ました。被災地は津波に

連休に帰省しましたが、 失っていたシェフは、は
より何もなくなつてしま

るばる遠方から来てボラ った町もあります。が、
ンティアをしている私の れきの山が残る中、少し

友人の姿を見て「自分も ずつ活気を取り戻してい
ます。

皆さんも機会があれば

皆さんも機会があれば

皆さんも機会があれば

皆さんも機会があれば

皆さんも機会があれば

皆さんも機会があれば

皆さんも機会があれば

皆さんも機会があれば

皆さんも機会があれば

皆さんも機会があれば

皆さんも機会があれば

私のふるさと、被災地の今

県立看護大学 助産学助教

菊地 美帆

れ戦場のようになった町のボランティアの方たち 店を再開し頑張つて生き
ぜび旅行などで訪れてみ
ていく決心をした」と話
てください。ボランティア
アだけが支援ではありま
せん。被災地のことを忘
れないことが今、私たち

途中で引き返してきまし 波で亡くした友人は「おた。
どんなことがあつて
にできる支援かもしれせ

おくつてあげられなかつ ても、人は人との関わり
のん。

中の前向きに生きていけ